

まあ、お前こそ猫みたい

その食卓のそばにチョコリと座った。

それで、それを見て、母は、
そばでテレビを見ている僕に、
皿の上の魚を見張るように言った。

そばの我が家の猫に、僕は目を向けた。
猫はキョトンとして僕を見ていた。

僕は魚を食べるのが下手だ。
皮や黒みなどを残し、
背中の白身しか食べない事を、
うちの猫は知っていた。
必ず食べ残りをもらえるものと、
じっと、猫は待っていたのだった。

それなのに、なぜ冷たいきつい目で
僕が自分を見ているのかと、
首をかしげ、不思議そうに、
猫は僕を見ていたのだった。

僕はその後、ニコリとして、
「疑って御免ね。」と言って、
テレビの方へわざと顔をそらした。
猫は魚をとらなかつた。
反対に、猫はニャオーと泣き、
私の注意を引こうとした。
「早く、食べて、お残りをくれ。」
と言っているようだった。